

吃音のある学齢児のための吃音理解教育プログラムの開発

「きつ音の勉強」の作成及び、通級指導担当教員、言語聴覚士、吃音当事者、保護者への意見聴取

○小林宏明

（金沢大学人間社会研究域学校教育系）

KEY WORDS: 吃音、学齢児、理解教育プログラム

（目的）筆者が 2009 年に発表した「ICF に基づいた学齢期吃音アセスメントプログラム（AP）」（小林，2014）は、発表から 10 年以上が経ち、日本の言語障害通級指導教室担当教員や言語聴覚士から一定の支持を得ている。しかし、吃音のある児童生徒の指導を行っている言語障害通級指導教室担当教員や言語聴覚士から、AP の有効性や問題点についての意見を詳しく尋ねたことはない。そこで、この度、筆者は、(1) AP の各課題から、全ての吃音のある生徒に学修が求められる基本的な課題を精選・再構成した「きつ音の勉強」を作成すると共に、(2)「きつ音の勉強」に対する言語障害通級指導教室、言語聴覚士、吃音当事者、吃音のある児童生徒の保護者への意見聴取を行ったので報告する。

（方法）I. 「きつ音の勉強」の作成 AP の各課題から、(1) 全ての吃音のある生徒に学修が求められる基本的課題、(2) 吃音の指導の導入で使用、の 2 つの要件を満たす課題を抽出・構成した。なお、プログラムの目的は、(1) 吃音に関する基礎知識を理解する、(2) 自身の吃音への態度や感情を理解・内省する、(3) 吃音にどのように対処すればよいかを理解・自己考察する、の 3 点とした。

II. 言語障害通級指導教室、言語聴覚士、吃音当事者、吃音のある児童生徒の保護者への意見聴取 言語障害通級指導教室担当教員、病院等に勤務する言語聴覚士 27 名、吃音当事者、吃音のある児童・生徒の保護者 12 名に、Web 上の E-learning システムを用いた「きつ音の勉強」の妥当性を尋ねる意見聴取をした。E-learning システムには、「きつ音の勉強」の各課題の説明動画や使用する教材の見本を掲載した。また、意見聴取の項目は、「きつ音の勉強」の各課題についての意見（各課題の、目標、指導観、指導計画、評価の観点の妥当性等）、「きつ音の勉強」の全体構成についての意見（プログラム全体の目標、指導観、指導計画、評価の観点、吃音のある児童・生徒への指導プログラムとしての適切性）などであった。なお、本研究は、「金沢大学人間社会研究域人を対象とした倫理審査委員会」の承認を得て行なった。

（結果）I. 「きつ音の勉強」の作成 AP の各課題から、表 1 にあげる課題を抽出・構成した。

II. 言語障害通級指導教室、言語聴覚士、吃音当事者、吃音のある児童生徒の保護者への意見聴取 調査協力者の大半は、「きつ音の勉強」の各課題及び、全体構成を適切と回答した（表 2）。ただ、少数ではあるものの、全体構成における「評価の観点」や、一部の課題における各評価項目に適切でないと回答した対象者がいた。また、「きつ音の勉強」への意見を自由記述で尋ねたところ、「知的発達に遅れのある生徒への適応には工夫がいると思う」、「『吃音があることは悪いことではない』ことと、『吃音の乗り切り方や、吃音がでにくい話し方の練習を提案する』ことは矛盾しないだろうかと思う」、「保護者指導の内容も含まれた方がよい」、「全ての項目を実施するのではなく、子どもによって必要な内容を取捨選択できる方がよいのではないか」などの回答があった。

（考察）調査協力者の大半が、各課題及び全体構成を適切と回答したことから、「きつ音の勉強」は、言語障害通級指

表 1 「きつ音の勉強」の構成

I. 毎日の生活を振り返ろう
(1) アンケート
II. きつ音について学ぼう
(2) きつ音ってどんなもの？
(3) きつ音って悪いこと？
(4) きつ音について詳しく学ぼう
III. 自分のきつ音について考えよう
(5) きつ音で困っていることを書き出そう
(6) 自分のきつ音の特徴を考えよう
(7) きつ音が出ている時の体の状態を考えよう
(8) きつ音が出ている時のこころの状態を考えよう
IV. きつ音の対処法を考えよう
(9) きつ音が出にくい話し方の工夫を考えよう
(10) きつ音の乗り切り方考えよう
(11) きつ音で困っていることの作戦会議
V. まとめ
(12) まとめ

表 2 意見聴取の結果*1)

		1	2	3	4	5	6	7
目標	教員等*2)	100	100	95	100	100	100	100
	当事者*3)	100	100	100	100	100	100	100
教材/ 指導観*4)	教員等*2)	100	90	90	100	96	91	100
	当事者*3)	92	91	100	100	100	91	100
指導 計画	教員等*2)	100	100	100	100	100	100	100
	当事者*3)	92	91	100	100	100	91	92
評価	教員等*2)	95	100	90	100	100	100	100
	当事者*3)	92	91	100	100	100	91	92
		8	9	10	11	12	全体	
目標	教員等*2)	100	95	100	100	100	100	
	当事者*3)	100	100	100	100	100	100	
教材 / 指導観*4)	教員等*2)	100	95	100	100	100	100	
	当事者*3)	100	100	92	100	100	100	
指導 計画	教員等*2)	95	95	100	100	100	96	
	当事者*3)	100	100	100	100	100	100	
評価	教員等*2)	100	95	100	95	95	100	
	当事者*3)	100	100	100	100	100	100	

*1) 肯定的な評価（適切である）と評価した者の割合（％） *2) 通級指導教室担当教員、言語聴覚士 *3) 当事者・保護者 *4) 「教材」は各課題、「指導観」は全体の質問項目

導教室担当教員、病院等に勤務する言語聴覚士、吃音当事者、吃音のある児童・生徒の保護者から概ね肯定的な評価が得られたと考えられた。しかし、適切でないという回答があったことから、「吃音の学習」の各課題や全体構成の再検討が必要と考えられた。再検討においては、「『吃音があることは悪いことではない』ことと、『吃音の乗り切り方や吃音が出にくい話し方の練習を提案する』ことを矛盾しない形で生徒に伝える方法を考える」、「生徒の年齢や、吃音への認識に応じた構成を考える（年齢別、吃音への意識や困難の程度別にサブプログラムを作成するなど）」、「生徒の気質・性格や知的発達の状況に応じた構成を考える（気質・性格別、知的発達の程度別にサブプログラムを作成するなど）」などを考慮する必要があると考えられた。

（文献）小林宏明（2014）：学齢期吃音の指導・支援 ICF に基づいたアセスメントプログラム 改訂第 2 版. 学苑社. 本研究は JSPS 科研費 JP18K02787 の助成を受けたものです. (Hiroaki KOBAYASHI)